

# 音読で切り込み、読み深める授業 —「ごんぎつね」の山場での実践—

愛知県北設楽郡設楽町立田口小学校

佐々木 計江

## はじめに

本校では、子どもの声と笑顔があふれる学校にと願い、音読を国語の授業の中核に位置付けた研究を十年間に渡って続けている。音読を通して言葉に寄り添って読み深める授業を展開し、国語力の伸長を図っている。

ここでは「ごんぎつね」の実践を紹介し、音読の有効性を提案したい。

## 一 音読で山場を読み深める

### 1 会話文の音読の工夫で切り込む

物語の授業では、会話文の音読の工夫を切り込み口として人物の気持ちを想像することが、心情理解や場面把握に効果的である。

償いをするごんの優しさを知らずに「ごんを撃ってしまった兵十の言葉、「ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのは。」の音読の工夫を通して兵十の心情に迫り、クライマックスを読み味わう授業を行った。

### 2 授業の目標

●兵十の会話文の音読を工夫し、憎しみから共感へという兵十の心情の変化や、深い悲しみを読み取ることができると。

### 3 発問と指示

読み方と心情の説明を切り離してしまつと、音読を通しての心情理解は実現しない。「ごんを撃ってしまった兵十が言ったこの言葉は、どのように読みますか。音読の工夫と、そのときの兵十の気持ちについての考えを絡めながら、自分の思いを語ってください。」

会話文を板書した後、子どもに投げかけた。

教師は発問や指示をしたら、後は子どもが考え、意見を言うのを待てばよい。待てずに追い打ちをかけるように発問や指示を繰り返すと、子どもは語らなくなってしまう。教師が言葉を精選し、子どもが語る授業をつくと、子どもの目は輝き出す。

### 4 子どもの音読と発言の様子

①兵十の気持ちに寄り添つた音読から

発問後すぐに出たのは、その場の状況から「驚き」「後悔」「悲しみ」などの兵十の気持ちをとらえた意見であった。

●びっくりしたように読む。(音読)「ごんがくりをくれたことを初めて知り、驚いたから。」

●驚いたというのもあると思うけれど、撃つてしまって真実が分かって後悔しているから、悲しそうに小さな声で読む。(音読)

●ごんの優しさを知ってすまなかつたと思っている。すごく悲しそうに読む。(音読)

②表現、表記に着目した音読から

「書きぶり、表現はどうなっていますか。」と、表現、表記への着目を促す補助発問をすると、言葉に即した次のような意見も出た。

●前は「ぬすみやがった」「ごんぎつねめ」と怒りを込めて乱暴な言葉で言っていたけれど、「ごん」と優しく語りかけている。兵十の憎しみの気持ちが消えた。(音読)

この意見は、前の部分の叙述と比較しての

根拠のある意見であり、説得力がある。

●普通の文と言葉の順番が違っている。「ごん、おまえだったのか。」が先に来ている。先の文を少し強く読む。(音読) ごんを大切に思うようになったことが分かる。

繰り返し音読をし、補助発問をしたことにより、このように倒置の表現に着目した意見も出た。言葉に即した読み取りを通して、兵十の気持ちの変化をとらえることができた。

### ③位置関係をとらえた音読から

声の届け先にこだわって音読しながら発言する子どももいた。音読を通して人物の位置関係をとらえ、場面を再現することができた。

●兵十は横たわったごんに声を届けている。

●倒れてしまったごんを見て、ごんに向かってつぶやくように言った。(音読)

### ④間にこだわった音読から

音読と絡めて兵十の気持ちに迫る話し合いでは、多様な興味深い意見が出てきた。

●ごんを撃ってしまった兵十は、呆然としていた。こんなときは、声は出ないから、「ごん」と言った後に、間をあける。(音読)

こう述べた子どもは、五秒ほど間をあけて読み、思いのこもった音読をした。その音読を聞いていた他の子どもの表情からは、納得、共感といった様子が伺えた。教室は心地よい緊張感を伴った学びの空気に包まれた。間を

取ると、呆然としている兵十の様子や、兵十の驚きや深い悲しみがよく伝わってくることを確認し合い、授業は深まった。

### 5 音読で心情理解

子どもたちは音読をしながら兵十の思いを想像し、気持ちの変化ややりきれない悲しみをとらえた。音読の工夫が心情理解を促すということを、改めて実感した授業であった。

ここでの読み取りは、その後の授業にも生きた。ごんと兵十の心が結ばれたことへの共感や、やっと分かり合えたのが別れの時きだったという悲しい結末のせつなさなどを語るまよめの授業へと自然につながった。

## 二 音読の効果的導入を

学習指導要領では、音読は「声に出して読むこと」と表されており、「内容理解をねらいつつ」と書かれている。音読を手立てとして活用し、心情理解を深めた本実践は、その趣旨を踏まえたものである。

音読を生かして読み深めるのにふさわしい教材は多い。例えば、「かさこじぞう」の大年の市の場面で群読を取り入れると、より臨場感が出て、場面の様子をありありと想像することができる。また、「注文の多い料理店」では、音読することで、軽妙、かつ、辛辣な宮沢賢治独特の表現を味わうこともできる。

音読を位置付けると、想像だけが空回りするということがなくなり、言葉を根拠にした読み取りが可能になる。教材を分析し、音読を導入することが効果的な場面を吟味し、意図的に位置付けたいものである。

### おわりに

国語の指導法は多様にあるが、音読を生かすことも有効な一つの方法である。音読を取り入れると、教室に子どもたちの声が響くようになり、授業が活性化される。音読を通して詩や物語に親しむ子どもを育てたいと思う。

ささき かずえ 音読で読みを深める授業や子どもとともに創る群読についての研究を継続。音読と作文の指導は、私の生きがい。